

霸權交代6

民主の女神

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1~25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の ▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の □ キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
- 本書籍の画面解像度には 1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
安田忠幸

目次

プロローグ	
第一章	L A W S
第二章	交換教師
第三章	ゴースト
第四章	暗剣
第五章	戦争特派員
第六章	ゲーム・チエンジヤー
第七章	U D T 対決
第八章	二人の女神
エピローグ	

221 203 179 150 124 97 73 43 20 13

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

土門康平 陸将補。水陸機動団長。海南島で戦死した水機団長の後任として、小磯の戦時権限で水陸機動団長、陸将補に昇進した。現在、少々浮かれぎみで部下たちに嫌がられている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

原田拓門 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。十門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファ
ーク

たかやまけん 高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘル
スクア。

大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一萬 地図読みのプロ コードネーム：ガル

水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フイッシュ

田口甚太郎 二葉 姫路城 の鉄砲手 二
たぐちしんたろう にはな ひめじじょう のてつぱうし に

田口心太 一曹。部隊隨一の狙撃手。コードネーム：リサート。

比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。
コードネーム：ヤンバル。

三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

[姜小隊]

姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルニ。

うるしばらたけとみ 漆原式宣 藤長 美小隊ナンバー? コードネーム: バレル

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チ
エスト

井伊翔 一曹。姜小隊のＩＴエンジニア。コードネーム：リベット。
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：
ボーンズ。

川西雅文 三曹。元Ｊリーガー。コードネーム：キック。
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイ
ス。
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネー
ム：シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉
の同期。

〈水陸機動団〉
司馬光 水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

上園広樹 陸将補。水陸機動団長。不運にも流れ弾に当たり戦死した。
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〔第一ヘリコプター団〕

村田護人 三佐。村田家次男。
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

〔西部方面隊〕

葉室泰徳 二佐。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長。村田
護人三佐が教育部隊を出てはじめてUH-1汎用ヘリの操縦桿
を握った時の上官。

和嶋瑞恵 一尉。C Hのベテラン機長。

〈海上自衛隊〉

〔南支派遣艦隊〕

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

板東兼人 一佐。“かが”、艦長。

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36 Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3 C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

江川俊樹 海将補。

竹内幸輔 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦 “ほうしょう、〕

泉田宣泳 一佐。艦長。

橋口肇 二佐。副長。

宮城明日香 一尉。気象班長。

〔哨戒機部隊〕

波多野誠 一佐。“ヤマタノオロチ”、戦術航空士役。テスト・パイロットであると同時に、マサチューセッツ工科大学で航空工学の博士号を取った変わり者。コールサイン：メデューサ。

田端悟郎 二佐。“ヤマタノオロチ”、機長。

結城美佐紀 一尉。“ヤマタノオロチ”、副操縦士。

〈航空自衛隊〉

〔二〇二飛行隊〕

村田先斗 二佐。F-35 Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

〈統合幕僚監部〉

小磯小代里 統合幕僚監部参事官付国外運用班長。青柳睦己と岩倉久彌を尻に敷く督戦隊の官僚三人組の一人。制服組からは蛇蝎の

如く嫌われている。

〈防衛装備庁〉

島崎蒼士 しまさきそうし 技官。航法援助のシステム開発を行う若手。

〈海上保安庁〉

宇垣詠志郎 うがきよしろう 二等海上保安正。“なつぐも、艇長。

石橋大介 いしばだいすけ 三等海上保安正。“なつぐも、副長兼機関長。

梅野征悦 うめのゆきよし 二等海上保安士。“なつぐも、レーダー担当。

《内閣府》

古賀肇 こがはじめ 内閣府政策統括官（経済財政運営担当）。

《内閣官房》

青柳睦己 あおやぎむつき 内閣安全保障・危機管理室室長補佐。若手防衛官僚のホープだが、慎重派。海南島上陸作戦にも反対していた。

《外務省》

岩倉久彌 いわくらひさや 総合外交政策局安全保障政策課課長補佐。北米課が古巣。自ら国務省霞ヶ関出張所と自嘲するほどの対米従属派。

[吉野ヶ里]

盛田浩太郎 もりたこうたろう 吉野ヶ里中学校の校長。

白崎征途 しらさきせいと 吉野ヶ里中学校の教頭。

華原沙也 かはらさや 吉野ヶ里中学校の音楽教師。

文暁庭 ムンヒヨジョン 韓国から交換留学で吉野ヶ里中学校が受け入れていた若い教師。九大に留学していた。

葉室翼 はむろつばさ 吉野ヶ里中学校の新聞部部長。

枝野君枝 えだのきみえ 吉野ヶ里中学校の新聞部員。玄武ミサイルで軽傷を負う。

宇垣詠美 うがきよみ 記者。地元新聞社の入社三年目。全国紙を落ちて地元新聞社に就職。佐賀出身で宇垣詠志郎二等海上保安正の妹。

澤井芽俱 さわいめぐ インターネット・メディア会社の編集者にしてライター。“ゆう君ママの戦場リポート”を配信している。

アメリカ

《アメリカ合衆国大統領行政政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〔ソウルアメリカ大使館〕

ロバート・B・ワイズナー 大使。元太平洋軍司令官（海軍大将）。

コーディ・R・キム 政務官。国務省のキャリア外交官で、ワイズナーが韓国へ赴任する時、自ら指名してソウルに連れてきた人物。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカート 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵遠征軍〕

ウェイン・R・ヴァンペルト 中将。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35 Bのパイロット。

〔第三海兵師団第三偵察大隊B中隊〕

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊武装偵察隊を指揮。
フォース・リーコン

エイベル・リンクーン 曹長。アルベルト・タイラー中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

〈陸軍〉

デレク・キング 中将。黒人の陸軍中将。別名クラッシャー・キング。海口攻略の海兵隊を指揮するためにきた。

ダニー・ジェンキンズ 少佐。陸軍の心理カウンセラー。心的外傷後ストレス障害の治療を専門としている。元グリーンベレー指揮官で心理戦のスペシャリスト。デレク・キングのお目付役。

◆中国

《中央弁公庁》

ファン・ジュエ・マオ

範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

チイアリイ

賈 礼 日本の中国大使館経済専務官。

《陸軍》

〔海南島独立守備隊〕

マオ・アイ・チュン

毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアン・クアン・シウ

黃 冠英 大佐。作戦參謀。

〔第一〇一待機旅団〕

リン・カン

林剛 大佐。これまでの功績により昇進し、新たに第一〇一待機旅団の指揮をとることになった。

シイ・モン

石萌 中佐。ハワイでの戦いにおいて情報參謀として素晴らしい働きをみせて中佐に昇進し、部隊を率いることになる。

スク・トン

蘇桐 中佐。情報參謀だったが、石萌が參謀長役を固辞したため參謀長に昇進。

〔第 22 連隊〕

チ・エイ・エン・ホン・タツ

錢 宏大 中佐。第 22 連隊政治將校團副隊長。

ホオ・ウイエ

侯 煉 少佐。錢の部下。

シェン・ヤン

(瀋陽航空宇宙大学)

ジユウ・ビン・ビン

周 冰冰 博士。瀋陽航空宇宙大学。丸眼鏡の小柄な女性。

ハオ・ユー

皓宇 瀋陽航空宇宙大学の学生。

◆大韓民国

《国家情報院》

リュ・ジン・ヒ

柳珍熙 副長官。

チ・ジュン・ユル

池俊烈 中佐。副理事官。

ホン・ウン・ソン

洪應善 韓国大使館参与の肩書きをもつ。融和委員会のメンバー。

《空軍》

〔第 11 戰闘航空団〕

ソン・キョン・テ

孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

吳京周 オキヨンジュ 中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル
金眞一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

[海軍第五戦団]

オムジョンウォン
巖鐘元 太佐 参謀長

南智勲 少佐。『金寿鉉』、艇長。
ナム・ジ・ファン キム・スヒヨン

チャンイルジエ
張日載 大尉、副長。

〈海丘隊〉

孫周原 小説 海兵隊部隊を率いる

孫同原 少付。

斤季相 大佐。
白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨン デ ウン
鰐大因 小佐 副隊長

〔第二海兵師團〕

〔第二海兵師団〕
ユンベクヨン
尹白龍 士佐 第二海兵師団第二戦車大隊を率いる

シンガポール

クー・シェンロン 元首相。夫人は香港人の民主運動家である姚芳。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

〈海軍〉

ゴー・チョク・テオ 大佐。

霸權交代6

民主の女神

プロローグ

中国。海南島——。

F-35B型戦闘機のパイロットである村田凜子むらたまりんこ一尉は、混乱した意識の中、まず両手で何かを摑つかむことに集中した。

それはパラシユートの操縦索だ。両腕で摑んで、なんとか姿勢を回復しようと試みた。というより足搔あがいていた。

パラシユートは風に流され、自分が思うようには飛んでくれない。凜子はもがくことを止め、両腕から力を抜く。当然のことだが、足の下には何も無い。地面はもとより、コクピットの床もないのだ。

ただ何かにぶら下がっていることがこんなにも心細いものだと、想像などしていなかつた。

しかも、猛烈な速度で落下している。落下といえば聞こえはいいが、墜落ついらくと言つても過言ではない。

凜子の戦闘機は撃墜げつきされていた。脱出を強いら
れ、パラシユートにぶら下がり、ただ惨めに墜落して
いたのだ。イジエクション・シートも、すでに分離した後だ。

下に目を向けると、射出座席のパラシユートが見える。パイロットより先に落下するよう、その

パラシユートは小さく作つてあるのだ。

落ち着いてくると、戦闘機の爆音が耳に入つてきた。上空を、僚機がゆっくりと飛んでいる。

あれは兄が乗る編隊長機だ。

凜子の兄は二人とも、F-35 戦闘機に乗つている。長男の先斗は航空自衛隊のA型部隊の飛行隊長。次男の護人は自分と同じ陸自パイロット上りだが、今はヘリ空母を母艦にするB型の戦闘機乗りだ。

帰つたら二人の兄からどやされるんだと思うと憂鬱になつたが、その前に凜子には対処すべきことがある。墜落場所を選ぶため、パラシユートを操縦しなければならない。この島はいたるところに農業用の溜め池やダムがある。できればそこは避けたい。パラシユートのキヤノピーが覆い被さり溺死する危険があるし、ワニもどこかに潜んでいるだろう。

真下を覗くが、幸いにして湖はなさそうだ。見渡す限り山、そして森がひろがる。安全な着陸場所である草地は見えない。

住宅街も無いようだ。それも幸運なのだろう。殺氣立つ地元民に囲まれずに済むのだから。

こうなれば、なるべく茂みが薄い森を目指しかない。立ち木が低く、枝に引っかかるずに済みそうな場所を。

しかしパラシユートは、戦闘機の操縦桿を操るようにはいかなかつた。天候は微風で花曇り。地上はくつきりと見えてはいるが、操縦のこつを覚えた頃には、眼前に森が迫つていた。

なるべく両足を揃え、襲いかかる枝を払おうとするが、結果は、したたかに上半身を叩かれただけだつた。

地面に転がろうとしたが、茂った葉の中でキヤノピーが枝に引っかかり、どすんと地面に落ちて

いた。ただこれまでの間にしつかり減速できたからか、衝撃は柔らかだつた。

地面に座つたまま、四肢が折れていなことを確認する。ゆっくりと起き上がり、怪我の有無も確かめた。

幸いにして、たいした怪我はしていないようだ。真上を見上げると、モスグリーンのキャノピーが上部に引っかかっている。良い目印になるだろう。上空では、兄が乗るF-35Bが一度フライパスした。その爆音が去っていくと、南洋のジャングルの騒音が耳を圧倒する。蟬の鳴き声に、鳥のさえずり。

ここは北海道ではないため、罠^{ひぶま}と遭遇する危険が無いのは幸運だと言える。サバイバルする羽になつても、水辺に近寄らない限り、危険な肉食獣と遭遇する可能性は限りなくゼロだ。

凜子はパラシュートのハーネスをリリースし、

しばらくその場に立つてこれから取るべき行動について考えた。

まずは信号弾ピストルを確認する。これを真つ直ぐ空に発射できるよう、少しでも上空が開けた場所に出なければならない。そうでなければ、ヘリでの吊り上げもできないのだ。

レッドフレア三本に信号旗もチェックする。信号旗には赤外線反射塗料が塗布されていて、地面に広げると夜間でも視認性を高めることができた。それから位置遭難無線機の電源を入れる。ウォーキー・トーキーの電源も入れてみた。

毎日、出撃時にはこれらの電源を入れて作動を確認する。いつもはただの出撃前のセレモニーだが、これがいざという時に命を救つてくれるのだ。と今、身をもつて実感していた。

近くの枝を折ると、長さ一メートルほどの三角形の旗竿を作つた。それに、白いスカーフを巻き

付ける。

いざという時に、ここに戻つて来られるようだ。

そして一步を踏み出す前に、三六〇度、ゆつくりと全周を見渡す。一番明るいエリアを探すと、方位磁石を取り出し、自分が向かう方位を確定させた。

しかし凜子は、コンパスを取り出した瞬間、自分が重大なミスを犯したことに気づく。

脱出後は、着地するまでの間に自分の脱出方位を検討して決定しなければならない。地形の状況、水場の方位、人家などを探して、どの方角へ脱出するのが一番確実かを考えなければならないのだ。人家が見えなかつたせいで、それについて考えることをすつかり失念してしまつていた。

ここは、緩やかな斜面だった。一見水平に見えるが、よく観察すると東側に下る感じになつてい

る。地形を把握し、四〇メートルほど離れた場所に見えた開けたところへ移動を開始した。

その場所だけが明るくなつてゐる理由は、一本の倒木のためだ。森の競争を勝ち抜き、誰より先に成長した大木は、だが別の脅威と戦い破れた。おそらく台風の強風に負けて倒れたのだろう。

そこはせいぜい五メートル四方だが、見上げる

とぼつかりと空が覗いてゐる。

陵水基地からは、コンバット・レスキューが発進する頃だ。早ければほんの三〇分でヘリが飛んでくる。一時間ほどここで待機し——いや、九〇分待機してヘリのローター音が聞こえなければ、明るいうちに水場とねぐらになる場所を探して移動しなければならない。

いつたん落下地点に戻つた凜子は、自分と一緒に落したラフトを分解してサバイバルキットを回収した。海上に落ちなかつたのはラツキーだ。

これから野営用のテントを作るために、キャノピーを一部裂かねばならない。下から引っ張れば落ちてくるかと期待したが、びくともしない。

これは、時間をかけて作業するしかなさそうだ。こんなことになるなら、サバイバル訓練をもつと真面目に受けておくんだったと反省した。

メモ帳を取り出し作業手順を記録しようとしている時、遠くからヘリのローター音が聞こえてきた。それもCH-47JAや、UH-60JAなど複数のヘリのローター音だ。もともとヘリ・パイロットだった凜子は、回転翼機のローター音を難なく聞き分けることができる。

「ウォーキートーキーが反応して『信号弾を一発上げ、レッドフレアを焚け』と命じてきた。

すぐに回収すべき荷物を抱えると、先ほどの空間まで戻り、信号弾を上空へ向けて一発発射した。ヒューという甲高い音を発し、信号弾が輝きな

がら空へと上っていく。上空で小さなパラシュートを開き、今度は赤い煙を発しながら降下していく。

次いでレッドフレアを一本点火すると、朽ち木の上に置いた。湿気が凄まじいため、ここでは火災の心配はないだろう。赤い煙がもくもくとわき上がり周囲を包む。

しばらくすると、航空自衛隊のコンバット・レスキューのUH-60JAヘリが上空でホバリングに入り、メディックがホイストで降りてきた。「お怪我は?」と耳元で怒鳴つてくる。

「負傷は無し」と応じると、メディックはボイヤント・スリングの黄色い輪つかを差し出した。

引っ張り上げられてジャングル・キャノピーをようやく抜け出す。

周囲を見渡すと、戦闘機はもとより、陸自のキヤリバーCHや武装したUH-60JAが周囲をぶ

んぶん旋回していた。

地上にいたのは、ほんの三〇分余りだろう。自分が乗った戦闘機の撃墜は最悪だったが、救出は完璧だった。

凜子は一三〇億円の戦闘機を失い、四〇〇〇万円のゴーグル・モニター付き特注航空ヘルメットを抱えて生還した。

不幸なボタンの掛け違いによつてはじまつた南シナ海での軍事衝突は、米空軍による中国本土爆撃や中国が造成した人工島占領へと発展。人民解放軍によるオアフ島奇襲占領でピークに達した。

アメリカはこれをホノルルで結成されたレジスタンス部隊で撃退し、報復として中国大陸から南シナ海へと突き出した海南島占領作戦を開始した。そしてこの作戦には、危機の当初からアメリカ

と行動をともにしていた自衛隊も参加したが、中国は正面から武力対決するような真似はせずグリラ戦に徹し、島の外では、外交戦で着々と反撃した。

まず、アメリカとの関係が冷え切つていた韓国を説き伏せ自軍同盟へ引き入れると、韓国軍海兵隊の歩兵や戦車部隊を海南島へ上陸させた。彼らを日米の正面へと立たせたのである。

同時に東南アジアでも外交攻勢を仕掛け、東南アジアの戦略的要ともいえるシンガポールを寝返らせた。そして、3Dプリンターを駆使して製造した安価な機雷をマラッカ海峡に散布し、海峡の封鎖にも成功した。

一方、同盟国アメリカに反旗を翻した韓国は、アメリカ空軍による大規模爆撃を受け、発電網がブラックアウトしたことで、全土が石器時代に戻らうとしていた。港湾も機雷封鎖を受け、更に石

油備蓄基地も爆撃された。

日本政府は、韓国政府からの要請を受け、人道的措置として部隊を釜山^{ブサン}に派遣。掃海作業に当たつていた。

勝敗は——微妙だった。

アメリカはホノルルを奪還し、上陸した人民解放軍に白旗を掲げさせたことで一瞬沸いたが、国民が満足したわけでもない。もつと目に見える成果として、中国を支配する共産党政権の打倒を最終目標に据えていた。

一方中国は、オイル・ルートを閉ざされる。ロシアからの細々とした援助はあるにせよ、人民は窮乏した。香港^{ホンコウ}では独立運動が吹き荒れ、事实上、海南島も手放した状態だったが、外交面で味方を増やし、部隊を小出しにしながら後退するという、お得意の持久戦に日米同盟軍を引きずり込もうとしていたのだ。

それに対し日米同盟軍は、海南島のすでに八割方を占領し、あとは北部の要衝海口市^{カイコウ}のみとしていた。そして中国にとつての絶対防衛線である香港を揺さぶるため、香港独立派の支援も強化しつつある。

現状は中国もアメリカも、自らの有利を主張している。それは、どちらも真であり、また嘘だつた。

しかし前線で戦う兵士たちは、解放軍にせよ米軍、自衛隊にせよ誰一人自分たちが勝っているとは思っていなかつたのだ。

第一章 LAWS

陸上自衛隊水陸機動団を率いる土門康平^{どもんこうへい}陸将補がこの任に就いたのは、つい昨夜のことだった。

それまで土門は第一空挺団第四〇三本部管理中隊長という、ぱつとしない肩書きをもつていた。

これは、公式にも非公式にも存在しないことになつてゐる特殊部隊〈サイレン・コア〉の世を忍ぶ仮の部隊名だったが、それでも一佐として率いていたのは、たつた三個小隊一〇〇名の部隊にすぎなかつた。

前任の水機団長が流れ弾に当たつて戦死したため、戦場にいた官僚と上級士官全員の合意で、土門が後任の水機団長として任命され、階級も上が

つたのだ。

だが自分が今、三〇〇〇名にも膨れあがつた部隊を率いているという実感は、なかなか得られるものではない。そもそも部隊規模がどの程度なのか、誰も知らないのだ。

この戦争がはじまった頃は、二〇〇〇名もいなかつたはずだが、隊員が補充され車両も乗員付きで新たに配備されたため、その実数を正確に把握している幕僚はいない。

引き続き土門は、使い慣れたブツシユマスター指揮車を手放す気はなかつた。

それにしても皮肉な話だ。米海兵隊に付き合つ

て海南島に上陸する作戦を聞かされた時、誰より反対したのは土門本人だつたのだ。

二度と中国大陸に軍靴で踏み込まないというのは、発足以来、自衛隊にとつては不文律、基本戦略以前の問題だつたからだ。

あの泥沼の一五年戦争の再来はごめんだ。少なくとも土門は、旧陸軍がこの大陸で何をやらかしたものかを知悉してゐた。陸上自衛隊の誰よりも、中國での作戦に詳しい自信があつた。

だが、海南島は大陸ではない、離島であるといふ小役人どもの政府側説明に押し切られていた。

それを陸自に強いた官僚組はしばらく海南島に留まり、陸自部隊と行動をともにしていた。負傷し、戦争の現実を嫌と言うほど体験して引き揚げていつたが、無茶を命ずる性格は弾の雨を潜り、山積みされた戦死者の亡骸なきがらを目撃した後も変わらなかつた。

官僚連中が引き揚げたことで、土門の頭痛の種がひとつ減つたことになる。代わつて、別の案件は増えていたが……。

一方、アメリカ軍海兵隊は、まるで何かに祟られたかのように作戦が頓挫とんざし続けていた。

まず、海南島最南端の中国海軍基地を事実上無血占領して大量の補給物資を陸揚げした直後、ロシア軍による一〇〇〇機からのドローンの編隊スワード攻撃を受け、補給物資のほとんど全てを失つていた。そのせいで、橋頭堡きょうとうばからの進撃を中断せざるを得なくなつてゐる。

その後、陸自が南東部の島内最大規模の軍用飛行場を確保し空路からの補給を開始すると、海兵隊は陸自に相談もなく、空から海南島北西部にある加來空軍基地ジャライを襲撃し、ここに空挺堡を確保した。

この空挺堡確保に気をよくした海兵隊は、基地

の防備を固める前に、最終目的地である海口攻略へと陸路出発するが、その隙を突かれた。人民解放軍部隊が、加來基地を襲撃してきたのだ。

すんでのところで土門の部隊が間に合い、基地奪還は阻止でききたが、海兵隊は中隊規模の部隊が全滅し、指揮官は更迭こうとうされた。

ここで海兵隊指揮官として新たに派遣されたの

は、海兵隊の将官ではなく、陸軍の予備役中将だった。やり手とがだが強引な性格が平時には仇あたとなり、パワーハラを咎められて引退していた男が軍に呼び戻されたのである。

その男——デレク・キング陸軍中将は、これまで強引な作戦ではあるが見事にホノルルを奪還し、期待された使命を果たしていたのは事実。ホノルル解放作戦に参加していた土門もその力量を間近に見ていたが、正直、戦争でもなければ付き合いたいと思う人間ではなかつたし、ましてや自分の

部隊を預けるなどまつぶらだと思つていた。

海南島攻略は海兵隊主導の作戦で、陸軍はいかつた。クラッシャー・キングの異名をもつ陸軍軍人である彼が海南島に現れるとは夢にも思わなかつたが、国防総省は陸軍のキングに海兵隊の指揮を執らせることにしたのだ。

これはまさに悪夢だつた。

前門の人民解放軍に、後門のクラッシャー・キング——。

キングは最大限評価すれば悪人ではないが、勝利を得るためなら部隊を一つや二つ全滅させてもかまわないという主義をもつ。そこから潰クラッシャーし屋キングのニックネームがつき、本人もそう呼ばれることを嫌つていはない。

また彼には不思議とカリスマがあつた。平時はわざと南部なべ訛りで喋り、気さくな黒人将官という衣を身に纏まよつてゐる。そして戦時の彼の言葉には、

ある種の力が籠もつていた。それで不思議と兵士の士気は上がるのだ。

部下をこき下ろす時にはピストルを抜くほど過激な男だが、喜怒哀楽を隠さない素直な性格を慕う下士官も多い。

つまりは土門と全く正反対の男が、クラッシャー・キングだったのだ。

数時間前、韓国軍の待ち伏せ攻撃を撃退した後、夜が明けてから、ゴムの樹の中での作戦会議のことを土門は思い出していた。

作戦会議というよりは、立ち話だ。双方の幕僚スタッフを交えての立ち話。

現在は、孤立していた海兵隊部隊とようやく合流を果たし、いよいよ海口へ向かうためのルートを決定する必要があった。

もちろん、完璧なルートなどない。近道は無く、

敵の待ち伏せがないと言い切れる安全なルートもない。距離や味方の兵站能力、そして空からの援護等を考慮して、どのルートが少しマシかという話をしてた。

土門は、できれば内陸寄りのルートを選択したかった。海口への距離は若干長くなるが、大陸から進出してきた敵航空部隊が到達する前に、味方の戦闘機部隊が十分な安全距離をもつて叩けると判断していたからだ。海寄りのコースは、あまりにも大陸に近すぎる。

逆にキング中将は、敵航空部隊を誘き出すためにも、海寄りのコースをとるべきだと主張した。敵地上部隊が集結している場所もわかつていると断言する。

この数日、敵が防御ラインを敷いて路上に障害物を置いている場所が何カ所も確認されていたが、

中でも一番大きな障害物エリアが海側ルート上に存在していたのだ。

土門は、それは罠だと判断していた。そこにいる部隊こそ、ホノルル攻略部隊の残存兵だという確信があつたからだ。

キングも、ホノルルからシンガポール経由で帰国した部隊であることには同意したが「罠だとして、それを回避すべき理由が何かあるか」と問うてきた。

ここで敵を殲滅^{せんめつ}できれば、それでこの戦いは終わる。それに、海岸に近いのが拙いというのであれば、味方艦隊をトンキン湾に入れて援護させればいいという主張をしてきたのだ。

海岸線に近いルートとはいえ、海縁を走るわけではない。艦砲射撃の援護が得られるわけではなかつたことで、海自は難色を示した。謎の戦闘機が海南島上空を飛び回り、味方の航空機を撃墜し

たことがあるからだ。

最初は海兵隊の戦闘機や輸送機が襲われたが、今朝、遂に味方の戦闘機が撃墜された。見えないという意味で、海兵隊はその機体を「ゴースト」と呼びはじめた。

艦隊といつても、そこにアメリカ海軍戦闘艦艇の姿はなく、実質海自艦隊だ。しかも南シナ海条約機構艦隊として東南アジア各国の艦艇も参加している。それらはあくまでも南シナ海のパトロール目的で参加しているのであって、海賊相手ならともかく、本格的な戦闘は難しい艦もある。リスクは冒^{おか}せないと判断で、海自はトンキン湾展開を断つてきた。

だが、キングの言い分にも説得力はあつた。
敵と対峙するエリアは都市から離れていて、逃げ遅れた大勢の地域住民を巻き添えにする心配はない。敵に地の利がある土地の都市部で戦うとな

れば、凄惨^{せいさん}な市街戦は避けられないだろう。

それはホノルルとは逆の状況になる。敵の正規軍部隊は、なるべく都市の外で接触して叩き潰すべきなのは事実だ。

結局、土門はキング中将の決断にのることにした。敵を避けて海口市まで辿り着いたところで市街戦に陥り避難民を巻き添えにして戦うよりは、少しでもここで敵の戦力を削るべきだと思ったからだ。

海兵隊と水機団合同軍は、加來基地から直線距離で五〇キロ、海口中心部まではほんの一〇キロの場所まで迫っていた。市との中間地点よりかなり海口側まで前進している。海岸線までは、一〇キロ余り。

老城鎮南のそこは、嫌らしい場所だった。国道225号線と高速98号線が8の字状のインター・エンジで交差し、近くは鉄道も走る要衝だ。

海口に入る、最後の要衝と言えた。

だが、そこを突破してもすぐ蛇行した川が走っている。敵は十重二十重に防御網を敷くことができるのだ。

そして、国道上も高速上も、今は長さ二、三〇〇メートルにわたり、ありとあらゆるもので封鎖されていた。建築資材用の丸太やトタン板から、どこから持ってきたのか、さびついた廃車にバスやダンプカーも横倒しにされている。ご丁寧にも、タイヤは外されていた。

そこは加來基地から海口市へと向かう複数のルート上で、守る側にとつては最高の要害だ。高速に沿つて走る鉄道から北側は、海岸に至るまで中層の住宅街が建ち並ぶ。この辺りは、今や海口市のベッドタウンとして整備されていた。

インター・エンジを無事に通過したら、今度は曲がりくねつた川が立ち塞がる。海岸から奥地ま

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。